

若い衆カモーン!

…技術もヒトもつながるように…

ちにたふあーむの巻 (北海道空知郡)

北海道上富良野町。初夏には、なだらかな丘にラベンダーの紫、小麦の金色、サトウダイコンの鮮やかな緑がパッチワークのように美しいこの地に、「住むなら北海道!」という夢を実現させ、家族で環境保全型農業に取り組む家族がいます。

「ちにたふあーむ」は田中和正さんご一家の農場。1992年に上富良野にやってきました。そして1999年、ご長男の正太郎さんが跡取り宣言! 20代の若き後継者が誕生しました。



右から田中和正さん富佐子さん正太郎さん

■お父さんも新規就農

ちにたふあーむ。この不思議な名前をつけたのは田中和正さん。

「チニタはアイヌ語で"夢"。田中農場だと平凡すぎるし変に英語の名前をつけるのも…。旭川はアイヌの里でもあったから地元の言葉で名づけたかった。こういう生活が夢だったし、いつまでも夢を持ちつづけたかったしね……」。

和正さんは長崎の工業高校で教鞭をとっていましたが「海外移住」が長年の夢。3人のお子さんがまだ小さくて、海外はムリだなあと思ったときに「じゃあ日本で日本じゃないところ＝北海道だ!」と思い至り、移住を決めます。そして旭川周辺の数十の役場に手紙を送ることから場所探しを始めましたが、返事はたったの数通。しかしそのひとつに上富良野があったのです。

「富良野は観光地化されているからイヤだと思った。けれども家族旅行を兼ねて見に来てみるとそんなイメージとは違い、ひと目で"ここだ!"と心が決まったんだ」。決めたら早い田中さん、即断即決、翌春には家族5人と犬一匹で移住を果たしたのです。

和正さんは、「安全な農産物を食することは健康の源である」を基本に「百姓



正太郎さん担当のほうれん草。

自身も自然環境を守りながら健康な生活を継続していけるように"という想いを抱いて、これまでも、そし

てこれからも農業を営んでいきます。

■そして息子も夢を継ぐ

移住当時小学校6年生だった長男の正太郎さん。それからは学校の合間にずっと農作業を手伝ってきました。家族での農作業は楽しいけれど特に将来農家に! という思いはなかったそうです。そんな正太郎さんが「後を継ごう」と思ったのは2年前のこと。らでいっしゅぼーやNORTHのイベントに参加したことがきっかけでした。会員さんやスタッフ、他の生産者さんとの顔の見える関係に「こういうのもいいんじゃないか、うん、いいなって思った」のだそうです。

正太郎さんは今夏、ほうれん草のハウス栽培を任されました。短い夏の間に3度収穫するほうれん草ですが、今年はずりするような暑さに見舞われることが数度。朝曇っていて昼前から晴れたときのこと、かぼちゃ畑がひと段落つく昼ごろにハウスの窓を開ければいいかなと思って戻ったら、すっかり暑さにやられていて失敗してしまったそうです。

「今後は、今までに商品として出すことの出来なかったほうれん草たちが、来年そして次に向けて一本でも多く"ちにた"のハウスから会員さんの食卓に行けるように、もっと勉強をしてほうれん草と一緒に成長していきたいです!」

■しんどいときも楽しいときも家族なら

北海道の畑は広く、そのスケールに本州の生産者さんも驚かれます。それ



人参畑。「振り返って自分が除草した畦を見るのが気持ちいい!」と富佐子さん。

だけに除草にかける人手もケタ違い。ですから北海道では農作業に多くの人を雇うのが一般的です。

正太郎さんは「財政的にも無理なだけだけど、家族なら十分気持ちも伝わってみんなが好きでやっているのが分かるし、どんなにしんどいときがあっても楽しいし、だからこのままでいいんです」と語ってくれました。

家族みんなでできる最大限のコトを家族みんなで力を合わせて精を出す。自然とともに家族とともにあろうとする和正さんの夢が家族の夢となり絆となっている。ちにたふあーむを思うとき、私の家族はどうだろうかと考えてみる。…家族がつながっているのってほんとうにいいですよ。

ちにたふあーむのつぶやき

「若い人がNews Letterに載るのはいいですね。どんどんネットワークを作って広げていきましょう」(和正さん)



「時々届く会員さんからのメッセージは僕の中では自信や目標となって次に活かしています。これからもいろいろなメッセージ、ご指導をよろしく願います」(正太郎さん)